

ミステリ読書案内

2019. 12. 16 発行元

第 16 号 伊藤 剛

中・高校生にお薦めの本その2

前の第6号の続き。今回はベテラン作家の上質のミステリを紹介したが、今回は、最初からジュヴナイル、YA（ヤングアダルト）として計画されたシリーズを2本。「ミステリーランド」と「ミステリーYA」の紹介。

講談社「ミステリーランド」

2003年ごろから講談社が企画したシリーズが「ミステリーランド」。30巻完結するのに13年かかった。当初予定は5～6年計画だったのだけれど、作家によって書くスピードはまるで違うから。恩田陸の2冊が最後の配刊になった。（今は講談社タイガの文庫になっている）

右表の各巻構成を見てもらえばわかるが、さすが講談社で、大物作家がずらりと並んでいる。他の出版社ではなかなかこうはいかないだろう。作家が28人なのは、恩田陸と高田嵩史が2巻になっているからである。

このシリーズ、値段が高い。皆、2000円以上だ。個人で買うには高過ぎ。洒落た窓のついた函入りで、ページの角を丸くした丁寧な造本。本棚に背表紙が並ぶことを考えた贅沢な本だと思う。

あらかじめジュヴナイルとして想定された作品なので、ミステリとしてのレベルは特別高いというわけでもないが、いずれの作品も作者の思いがこもっている。中でも、乙一の『銃とチョコレート』は、抜きん出て評価が高かった。『このミス』の年間ベスト10にも入っているくらいだ。

現在は、発刊から時間が経ったので、多くは文庫本になっているようだ。図書館では、ハードカバー箱入

で置いているところが多いので、借りて読むことは比較的簡単だと思う。

理論社「ミステリーYA！」

「ミステリーランド」より少し後に企画されたのが、理論社の「ミステリーYA！」シリーズ。「ミステリーランド」が小学校高学年から中学生向きだとすると、こちらの「ミステリーYA！」は少し中学生・高校生向き。

代表的な作品に大倉嵩裕の『オチケン！』があるが、落語の面白さが中学生にどこまで伝わるかな？ある程度の落語の知識があった方が楽しめると思う。そして、大学のサークル活動がイメージできると良いと思う。

「ミステリーYA！」シリーズ。私も全容は把握していない。計画的に発刊していたようでもないし…。主な本作品としては、折原一『タイムカプセル』、山田正紀『雨の恐竜』、柳広司『漱石先生の事件簿』、芦原すなお『カワセミの森で』、鯨統一郎『ルビアンンの秘密』、皆川博子『倒立する塔の殺人』などが含まれている。ネットで調べれば全部で何冊出ているかわかるだろう。

今、理論社で最初に出した本の形で見られるのは図書館ぐらいだろう。出版元の理論社そのものが行き詰まってしまったこともあるので。現在は、別の出版社からいろんな形

《講談社ミステリーランド全30巻》

我孫子武丸	眠り姫とバンパイア
綾辻行人	びっくり箱の殺人
有栖川有栖	虹果て村の秘密
井上雅彦	夜の欧羅巴
歌野晶午	魔王城殺人事件
内田康夫	ぼくが探偵だった夏
太田忠司	黄金蝶ひとり
乙 一	銃とチョコレート
小野不由美	くらのかみ
恩田 陸	七月に流れる花
	八月は冷たい城
上遠野浩平	酸素は鏡に映らない
加納朋子	ぐるぐる猿と歌う鳥
菊地秀行	トレジャー・キャッスル
北村 薫	野球の国のアリス
倉知 淳	ほうかご探偵隊
篠田真由美	魔女の死んだ家
島田荘司	透明人間の納屋
殊能将之	子どもの王様
高田崇史	鬼神伝 鬼の巻 神の巻
竹本健治	闇のなかの赤い馬
田中芳樹	ラインの虜囚
二階堂黎人	カーの復讐
西澤保彦	いつかふたりは二匹
法月綸太郎	怪盗グリフィン絶対絶命
はやみねかおる	ぼくと未来屋の夏
麻耶雄嵩	神様ゲーム
森 博嗣	探偵伯爵と僕
山口雅也	ステーションの奥の奥

で再刊されているものが多い。『オチケン！』のようにシリーズ化されたものもある。

ミステリ界全体から見れば、目立たないけれども、こういったジュヴナイルの本は、学校図書館などで必要とされている作品群なので、今後どこかの出版社で新しい企画を立て続けてほしいと願っている。将来の「本好き人間」を育てる意味でも。

私はジュニア物ミステリが大好きだ……小学生のころから、怪盗ルパンや怪人二十面相などで育ったせいか、大人になっても、60歳になっても「ジュニア物」が好きだ。図書館のジュニア・YA・コーナーにも遠慮しないで借りに行く。最初から、品質を保証されているような気がして、安心して読める。後で、はやみねかおるや松原秀行も取り上げるが、是非、大人の人にも読んでほしいと思っている。